

「戦後の大合併構想（2）」

全国の多くの市町村と同じように、東播磨地方での大合併構想も繰り返し繰り返し湧き上がりました。

最初の「大播磨市」構想が荒井村の不参加で白紙に戻った後も、「加古川、高砂両町では依然として合併の熱意を捨てず加古川、高砂、別府、米田、東神吉、尾上、野口七ヶ町村合併に出直さんとする意嚮」（『山陽新聞』昭和二十一年五月一五日）と、報じられています。

昭和二十二年四月、最初の公選首長が全国で誕生しました。高砂町では、善立寺住職の豊岡至道が保守派の町会議長らを退けて当選します。新町長は、六・三制のための学校整備、高砂町警察（自治体警察）や町立診療所の開設などにあたることになりませんが、こうした戦後の新事業に耐えられる財政基盤を確立する上で、やはり合併は、新町長にも避けて通れない課題になりました。

昭和二十三年二月の定例町会

で、高砂・加古川両町を含む七ヶ町村合併案は、一部議員退場後の採決で、かろうじて可決されます（『高砂市史・高砂町史誌』昭和五五年）。ところが、各町村の思惑はすれ違い、「播磨市」構想はなかなか具体化しませんでした。豊岡町長の方は、同年四月に辞職してしまいます。

神戸の特別市断行、姫路への県庁移転構想と関連して、両市間の一五ヶ町村による「加印緑地都市」計画も県に提出されていたところの話です（『神戸新聞・東播版』昭和二十二年六月六日）。

（高砂市史編さん専門委員

大森 実）



最初の公選高砂町長
豊岡至道